慈しむことの幸せ

二年 佐藤咲菜

私の家には二匹の猫がいた。私が生まれる前からいたお兄ちゃん猫だ。名前はチャムとコタ。チャムは六年前に天国へ行った。チャムはうちの子で幸せだったのかと母は泣いた。だからチャムが死んだ時、家族全員で大事な約束をした。「コタの嫌がることは絶対しない」ずっと抱っこしていたくてもイヤイヤしたら下ろすこと、コタがうちの子になって良かったと幸せを感じて生活できるように愛情をいっぱい注ぐこと。

去年の十一月二十二日の明け方、コタは天国に行った。十九歳だった。

時々けいれんを起こしたり、急に食べなくなったり、いっぱい食べ始めたり。私はコタに、少しずつ死が近づいていることを認めたくなかった。チャムが死んだ六年前とは違う。私はもう死ということを理解している。コタを抱っこできない、一緒に昼寝もできない。もうコタに何もしてあげられなくなるんだ。病院に行ったあと、うつろになっていくコタを抱きしめた。行かないで、まだ行かないで。

去年の夏、私は動物愛護のポスターを描こうとした。絵の元にする為にコタを抱っこしてたくさん写真を撮った。でも結局時間がなくて描くことができなかった。今はそのことをとても後悔している。

「ずっと一緒」その言葉を入れようと思っていた。あの時描いていれば、その絵と言葉が祈りになって、コタとあと一年、半年、一緒にいられたかもしれない。

「コタはうちの子になって幸せだったのかな」それはコタに聞いてみなければ分からない。答えはない。けれど、死んだコタの顔は笑っていた。お花を届けてくれた祖母も友達もピアノの先生もみんな、コタの顔を見て、

「笑っているみたい」

と言ってくれた。私にもそう思えた。

窓の所に顔を張りつけてひなたぼっこをしている姿、あの暖かくてオレンジ色の幸せな風景、それを思い出すだけでも私は幸せだった。私たちの家族になってくれてありがとう。

去年の年末、大そうじで普段そうじしない所までふきそうじをした。コタがひげをスリスリして茶色になった壁の角。コタの思い出を消したくなくて、残しておこうねとみんなが言った。コタがガリガリした壁の傷、よだれで汚れた椅子カバー、どれもずっと残しておきたい。

そして今年の夏、私は動物愛護のポスターを描いた。コタを抱っこして笑っている私と、私に顔をすり寄せているコタ。「ずっと忘れない」の言葉を入れた。

小さな命を慈しむことの幸せを覚えてくれたチャムやコタ。私の大好きな大好きなお兄ちゃん猫。一緒に過ごしたあの幸せな時間、絶対一生忘れない。